

2022年12月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

団栗拾ふ行きずりの子と競ひ
法の字の山の低さよ色鳥来
子に話す屋号の由来秋彼岸
芋水車いづこへ主行きしやら
星月夜光は過去を運び来て
秋彼岸闕伽もち庇へと日照雨

友永美代子
尾池葉子
原 稔
岡橋啓二
余米重則
伊藤武敏

氷凌集

壯漢の力散らして萱を刈る
新涼や左右揃へる蝶結び
龍淵に潜むテントに灯の透けて
石ひとつ懸橋として水澄めり
木瓜の実のひづみの見えぬ一つかな
擬似鳥の風任せなり稲の秋

吉田多々詩
大口彰子
古川邑秋
佐藤美智子
城島千鶴
渋谷啓子

2022年11月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

幾度も二百十日の空見上ぐ
送火に相和し風の出できたり
疲れ鶉の飛ぶ形して留まりぬ
火山岩据る棚田の稲の花
ウクライナまで一枚の秋の空
ひと口に程よき団子生身魂

友永美代子
尾池葉子
大島幸男
三和幸一
原 稔
中嶋文子

氷凌集

算数の好きな子の切る西瓜かな
噴水や明日へ勇気を押出して
麦藁の火の粉舞ひ上げ魂送
見通しよき宿場街道秋の風
星砂の真砂にまじる星月夜
蟬しぐれきつとあの日のヒロシマも

古川邑秋
大口彰子
羽鳥正子
佐藤美智子
宮城節子
重富國宏

2022年10月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

風穴を秘するごとくに苔の花
宵山の京に似合ひの俄雨
水音の溪より昏れて蛍の夜
谷よりの風の道あり夏座敷
冷奴ふと感じたる重力波
隠れ身の術の沢蟹追ひかけて

尾池葉子
大島幸男
三和幸一
原 稔
余米重則
中嶋文子

砂文字は波に返して夏終る
メドゥーサのやうなる髪や熱帯夜
有明の河口デルタへ夏の月
駅舎いま学習室や燕の子
眠る間も夏草伸びてをりにけり
正面は雲の峰なり橋長し

氷凌集
古川邑秋
大口彰子
四宮陽一
渋谷啓子
西村みゑ子
佐藤美智子

2022年9月

氷積の章

尾池和夫選

蛇皮線に隠る哀愁沖繩忌
子別れの鴉せはしき枝移り
吊忍夕餉の窓を広く開け
梅雨鯰ゆつたりと畦うつりたる
こころざし高き少年立葵
シンバルの一打の稽古レモン水

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
大島幸男
三和幸一
原 稔
中嶋文子

水底に石の深さや夏柳
夏燕方位磁石の針の赤
内地と言ひ本土と言はれ沖繩忌
線路沿ひの法面狭し姫女苑
故郷や蠅のみぬ家に蠅叩き
地響きのごとき轟き牛蛙

氷凌集
古川邑秋
大口彰子
重富國宏
城島千鶴
宮城節子
南田美恵子

2022年8月

氷積の章

尾池和夫選

麻服の質よき皺の身に添はず
畦道を去るまで鳧に騒がるる
風五月海へ傾るる棚田かな

霞袂集
尾池葉子
大島幸男
原 稔

釣竿のとんと撓まぬ薄暑かな
薫風や船頭棹を一突きす
ぱつと散る雑魚やほとんと紅椿

岡橋啓二
余米重則
伊藤武敏

氷凌集

母の日のたつぷりミモザサラダかな
万葉より麻佐礼留多可良こどもの日
おほかたの鳥の名知らず里若葉
熱り立つ馬を宥めて祭果つ
出力五の水車の勢ふ立夏かな
用水の音かろやかに田水張る

大口彰子
古川邑秋
真下章子
吉田恭子
高橋キセ子
益子桂子

2022年7月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

流れゆく水のきらめき聖五月
鳥帰る帰らぬものへこゑ落し
問はれたる吾は旅人花の径
鶯の一声在を明るうす
大地震来さうな予感亀鳴けり
花筵どの児の筆もさくら色

友永美代子
尾池葉子
大島幸男
岡橋啓二
余米重則
中嶋文子

氷凌集

二輪草絶えしと思ひぬしが増ゆ
純白の今治タオル入学す
段丘に沿ひ来る風や花林檎
橋脚に渦巻く川や柳の芽
病室も宿と思はばうららけし
染料の樹に色の札うららけし

佐藤美智子
大口彰子
羽鳥正子
城島千鶴
古川邑秋
高橋千画子

2022年6月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

誰が似たるか埴輪の面よ野蒜摘む
比良八荒遅延の駅の壁に倚り
啓蟄や歩めば水のにじみ出て
色違ふみづうみ五つ春の雨
交番の手持無沙汰や春の月
院生へ戻る主治医や木の芽風

尾池葉子
大島幸男
三和幸一
原 稔
余米重則
中嶋文子

氷凌集

淡海より京へ難波へ水温む	古川邑秋
春分の日や掌に磨く石	大口彰子
鴨川の中空すいと初つばめ	城島千鶴
出来たての土竜塚なりいぬふぐり	佐藤美智子
裏山を背負ふ境内竹の秋	渋谷啓子
うららかや賽銭箱に「幸千」と	重富國宏

2022年5月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

燕待つローカル線の駅舎古り	友永美代子
浅春や立砂にある雨の跡	尾池葉子
春時雨近江の小さき駅に立ち	大島幸男
白魚漁一人となりし四つ手網	原 稔
船を待つ糶場の屋根や雪もよひ	余米重則
渡し船の在りし辺りやの残る鴨	中嶋文子

氷凌集

熊笹の根方ざわつく余震かな	佐藤美智子
恋猫の熱き視線や寺の庭	古川邑秋
靴飛ばし明日は立春きつと晴	大口彰子
片藪のあらぬ方より雉立ちぬ	羽鳥正子
闇を来て闇に消えたり寒念仏	吉田恭子
山簷の雪は朝日を返しけり	重富國宏

2022年4月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

寒風に毅然と立ちし富士真白	友永美代子
初富士の笠雲育つ午後にして	尾池葉子
鈍空へ浚ひの風の起つ雪野	大島幸男
どんど火の村の四つ角塞ぎをり	原 稔
初糶や鳶口蛸を引き寄せて	余米重則
長靴にリュック背負うて初仕事	中嶋文子

氷凌集

寒の夜や盆地ますます底にあり	古川邑秋
ハーメルンの笛の近づく氷かな	大口彰子
寒禽のぶつかる玻璃に山の空	高橋キセ子
雪積むや往きの足跡踏み復る	重富國宏
雪ばかり見て雪の日の暮れにけり	酒井富子
川と森と鷺の通へる初景色	佐藤美智子

2022年3月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

落ちながら風を捉へて雪螢	尾池葉子
冬ぬくし包ほどけば鳩の寄り	大島幸男
裸木や緑豊かに寄生二つ	岡橋啓二
凍星やフォッサマグナは海へ果つ	余米重則
海越しの国生みの島冬銀河	伊藤武敏
夕餉にと一本釣りの鰯下げて	中嶋文子

氷凌集

潰えゆく蔵の日月冬桜	佐藤美智子
悴みてばたと教科書閉ぢにけり	大口彰子
冬ざるる囚人墓地に俱会一処	重富國宏
冬灯し地球儀に夜のうまれけり	古川邑秋
波板の氷柱にダイヤ百万個	羽鳥正子
増ゆるメモ減らすことより年用意	益子桂子

2022年2月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

流れ行く雲の速さよ山の秋	友永美代子
志の輔の嘶にマスクゆるびけり	尾池葉子
短日や鴉ひと声あげて去る	大島幸男
小六月まくらの長き落語かな	余米重則
水澄むやダム湖の底に石仏	伊藤武敏
点検終了三つ目小僧のラッセル車	中嶋文子

氷凌集

顔見世の招きに最良役者の名	四宮陽一
---------------	------

日向ぼこ手品の輪ゴム見え隠れ
反射炉の補強の錆や照紅葉
鳥居潜る寺のありけり鴨遊ぶ
信貴山の声明の宙木の葉飛ぶ
消防の詰所の灯る霜夜かな

大口彰子
古川邑秋
重富國宏
佐藤美智子
真下章子

2022年1月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

一病も二病も重ね冬迎ふ
ふるさとの名につられ買ふ新生姜
海原や朝熊へひたと鷹渡る
川風を軽くいなして貴船菊
旨さうな水迸る櫛紅葉
一曲を磨く一年鳥渡る

友永美代子
尾池葉子
岡橋啓二
余米重則
伊藤武敏
中嶋文子

氷凌集

はね太鼓背に踏み出せば月の道
水落し終へ食卓の握り飯
掘り起こす鉛筆ほどの甘藷
天井を歩く蠅螂迷子めく
旧道の空一変す黄落期
基地を囲む月桃の実の弾けけり

四宮陽一
古川邑秋
大口彰子
渋谷啓子
佐藤美智子
屋嘉比順子